

織田作之助関係書簡を読む (二)

中央図書館

小笠原 弘之
灘井 雅人
苗村 昌世
三島 美幸
八木 美恵

はじめに

前回に引き続き、中之島図書館所蔵「織田文庫」の平成29年度追加資料より、今回は作家・宇野浩二差出の書簡二通のほか、大阪・楞嚴寺で行われた、織田作之助葬儀における藤沢桓夫、柴田方彦両氏による弔辞の翻刻を掲載する。

凡例

- ・ 発信年月日／発信地住所／差出人／宛名人（その他情報）
- ・ 促音、濁点等が不明確なものは読みやすいように適宜修正した。
- ・ 吹出し等による挿入は文内の正しい位置に記載し、 で囲んだ。
- ・ 本人の書き間違い、誤植と思われる表記は、そのまま翻刻し、「ママ」を付した。削除が明らかなものは記載しなかった。
- ・ 振り仮名については言葉のあとに「」で記載した。

一 宇野浩二差出織田作之助宛書簡 【請求記号：織田文庫・書簡Ⅱ・66】

昭和二十年十二月十二日／松本市今町四三三より／宇野浩二／大阪府南河内郡野田村丈六／織田作之助宛（封書 便箋 四枚 速達 四十銭）

ソクタツのお手紙二つ一しよにとどきました。

「原稿用紙これで切れました」の方のお手紙のお返事―

○一 『宇野浩二の手紙』^{註1}のレンサイは結構ですが、題はやはり『宇野浩二論』(といふのはカタクルしいですが、まづさ^マか^カういふ題に近いもの)としていただきたいと存じます。それから、河原田中両大人^{註2}のところは、「伏字」ふせじ」は不快「フクワイ」ですから、削除して下さいませんか。(削除の仕方はおまかせいたします。)

二 「世界文学」の原稿まだです。―理由、十一月一ぱい切の小説は二つとも出来ず、十二月十日切の小説二つのうち一つ(筑摩書房「展望」の二号)は、どうしてもマヌガレられないのが最大の理由であります。それは社長(房主)が、また電報で、「九日に原稿とりに行く」と電報でおどかし、それを念押し、十五日までに仕上げてほしい、餘備のもの一つもないから、とヤハラカク^マ最^マ促^マされましたので、顔を見せられると、弱気になります。此頃の僕は、この約束が二ヶ月以上も前ですから、十日ギリギリと云はれましたので、十四日一ぱいに仕上げて、十五日午前六時の汽車(切符とどき次第)で上京しなければならぬ、といふことにされてしまいました。その上京中にたとひ十枚でも十五枚でも書いて「世界文学」社にお送りいたします。

上京は十五日―十九日くらゐのヨテイです。

三 桃源社^{註3}(武者小路^{註4}の劇作に『桃源』^{註5}といふ題)のものがあります。この作について批評したことがあります)の叢書には、

晴れたり君よ^{註6}。

一 と 踊^{註7}

枯木のある風景^{註8}。

の三篇を入れたのですが、三つ合はせますと、百十八枚になります。僕のは会話が少なくて、普通の人より活字にすると少なくなりま

すから、これでガマンしてもらつて下さいませんか。右のキリヌキは上

京前にお送りいたしますが、——と書きましたが、少し手を入れたいと思いますので、これも上京中に手を入れて、東京からお送りいたします。もう一つのお手紙のお返事——

◎「新文藝」^{註9}あての手紙のソコツ^{註10}は、おちついたあわて者であります僕のくせは記しましたのと、僕の机の上がいかにランザツであるかといふことにもなります。

「世界文学」になったことについての意見と同感であります。「翻譯の文学」^{註11}お送り下さる由、ありがたく存じます。これでほつとしました。」といふ御文句のために、また弱気をけしまして、「上京前に枚数少しでも、何とかいたします」といふ気になりました。

◎「オール読物」何とかして手に入れ（上京中に）拝見いたします。文藝春秋社といふところは、芥川賞候補作品を直木賞のそれにまはしてしまふアクヘキがありますので、『無法松』^{註12}がその一つ）あなたのお作を「オール読物」にまはした、とうかがひ、「又また」と思ひました。あきれました。殊に今は、永井龍男君^{註13}がセンセイ政治をしてをりますので、今後一そうヒドクなるでせう。

◎『夫婦善哉後日』^{註14}はやく御完成下さい。

◎辰巳君^{註15}は、（一般に島田君^{註16}の方がうまいやうに云はれますが、）ダイコ^{註17}（沢田君^{註18}そつくりのダイコ）のところがあります、ときどき光つた藝を見せると思ひます。（藝評だけになりました、つい。）

◎たべものにつられましても、（いえ、そんな事はコロリとしました、）京都と大阪にまゐりたいのと、あなたや京都大阪の方々にあふために、何とか切符を手に入れて、来年はなるべく早いうちに、おうかがひしたい、と思ひます。（思ふだけでなく、おうかがひいたします。）

◎稲葉健吉^{註19}といふ詩人は聞いたこともありません。文学パンフレットなど、お説のとほり、「以ての外」と存じます。

◎北條君^{註20}の小説（新作）は大へんうれしく思ひました。

◎伊吹さんのホンヤクのジイドの未発表の小説^{註21}たのしみです。土井先生^{註22}の譯された『ゲエテ論』は何といふ人の著で何といふ人が譯したの

ですか。

◎「世界文学」二号の小説は、三号か四号におのぼし下さいませんか。イヤクになることを恐れますから。その〆切の一月十日すぎか、おそくても二十日ぐらゐに何とかして御地へ行きたいと思ひます。でなく、やはり、どうかして、会合したいと思つてをります。

十二月十二日

織田作之助様

宇野浩二

今年の末から 来春にかけて、荷風先生^{註23}の作が少と有りますが、そのために、あまり面白くないものもかなりあるやうですが、何としてもメデタキことです。中で「展望」の創刊号^{註24}のが、一ばん長く、（百枚、）一ばんよいのではないでせうか。「展望」は、イヤな言葉ですが、ダアクホオスのカンがあります。

【註】（1）『宇野浩二の手紙』：織田作之助が『文化グラフィック』第3号（展望社 1946.8）に「宇野浩二先生の手紙」として掲載 （2）河原田中両大人：河原義夫（全国書房『新文学』編集者）と田中秀吉（全国書房の房主） 2人を指す。大人は、目上の人に対する敬称として使用していると推測される （3）桃源社：東京の出版社。上林暁『閉関記』を昭和21年に刊行 （4）武者小路：武者小路実篤（むしやのこうじ・さねあつ） （5）『桃源』：武者小路実篤による戯曲作『桃源にて』 （6）晴れたり君よ：初出『新潮』40巻4号（新潮社 1924.4） （7）一と踊：初出『中央公論』36巻5号（中央公論社 1921.5） （8）枯木のある風景：初出『改造』15巻1号（改造社 1933.1） （9）「新文藝」：虹書房刊行の文芸雑誌 （10）ソコツ：12月10日付織田の書簡に事情が

書かれている。12月7日付織田宛書簡に「新文藝」宛の手紙を一部同封してしまつたらしい (11) 『翻譯の文学』：宇野浩二が雑誌『世界文学』に寄稿予定だった作品 (12) 『無法松』：岩下俊作「富島松五郎伝」(『九州文学』昭和14年10月号、『オール讀物』昭和15年年6月号再録) のち改題「無法松の一生」 (13) 永井龍男君：永井龍男(ながい・たつお) 1904-1990 作家・随筆家・編集者 (14) 『夫婦善哉後日』：織田作之助の作品。昭和21年『世界文学』に二回連載して中断 (15) 辰巳君：辰巳柳太郎(たつみ・りゅうたろう) 1905-1989 昭和時代の俳優 (16) 島田君：島田省吾(しまだ・しょうご) 1905-2004 昭和・平成時代の俳優 (17) ダイコ：大根(役者)のことか。関西で大根ダイコ(牛蒡)「ごんぼなどと同様」 (18) 沢田君：沢田正二郎(さわだ・しょうじろう) 1892-1929 大正昭和時代前期の舞台俳優 (19) 稲葉健吉：12月10日付織田の書簡の翻刻には「稲葉由吉もと小学館」と書いてある。ただし、この書簡では「健吉」と読める (20) 北條君：北條誠(ほうじょう・まこと) 1918-1976 作家・劇作家 (21) ジイドの未発表の小説：『架空のインタビュー』アンドレ・ジイド作 伊吹武彦訳 世界文学社 1946 (22) 土井先生：土井虎賀寿(どい・とらかず) 1902-1971 哲学者・ドイツ文学者 (23) 荷風先生：永井荷風(ながい・かふう) 1879-1959 作家

二 宇野浩二差出織田作之助宛書簡 【請求記号：織田文庫・書簡Ⅱ・84】
 (差出し年不明) 一月二十一日／宇野浩二／織田作之助宛 (封書 便箋 三枚) 封筒なし

前略—おもひながら御無沙汰いたしました。それはお変わりになりました
お所書き^{註1}をしまひなくしたからでもあります。それを吉田定一さん^{註2}に問ひあはせなどしてゐたからであります。さて、自分の事(『翻譯の文学』のこと)をタナに上げて、おたづね申しますが、「世界文学」はどうなつてゐますか。大へん失礼ですが、おうかがひいたします。
 ◎僕は、(この数ヶ月来習慣になりましたが) 明後日(二十三日) 二三日タイザイのヨテイで上京いたします。—いかがでせう、上京はだいたい**毎月**中旬後になります、その僕の上京します時分に、どうです、あなたも御上京なさいまして、東京で、木村君^{註3}と鼎談(三人談)をしなから、夕ごはんの御相伴をしたいと思います。
 ◎吉田さんのおたよりに、桃源社(いい名と思ひますが)が、「先手を打たれた形」となつたために、三島書房^{註4}と改名されたさうですが、すると、桃源叢書が三島叢書となるのですか。いづれにしても、『枯木のある風景』と、初期(大正九年十二月作)の『八木弥次郎の死』^{註5}と(これだけでは人の死ぬ話が二つになりますから)『晴れたり君よ』(大正十三年三月作)を一冊にまとめたいと存じます。ところが、その題名を『枯木のある風景』としますと、かつて出しました単行本と同名になりますし、『八木弥次郎の死』は、その頃、菊池寛君^{註6}にもほめられ、僕もちよつと自信があるのですが、これは日本語の題名として面白くなりませんし、『晴れたり君よ』も、(これは大正十四五年頃ですが)単行本の題にしましたので、題名にちよつと迷ひました。ところが、数年前に、『晴

れたり君よ』が、上海の太平書房といふ本屋から出しました。「日本小説選集」^{註7}の中に、無断で支那語にホンヤクされました、(訳者は章克標^{註8}といふ人)その題が『日麗好日』といふのですが、どうでせう、織田さん、これを表題にしましたら。それとも、「晴れたり君よ」(「好的天気暇」といふのを、『好的天気』としましたら、いかがでせう。しかし、やはり、これもイヤですから、『八木弥次郎の死』のかはりに、『一と踊』を入れてまして、『一と踊』とゆふ題にさせよう。すると、

50 40 28
118 百十八枚

となりませう。

◎さて、ふたたび失礼なことを申し上げますが、「世界文学」が本当に(たしかに)出るのでしたら、『翻譯の文学』^メ切は何月何日ですか。それから率直にお聞きいたしますが、稿料はいかほどですか。

◎それから、『一と踊』は、吉田さんに送りませうか、あなたにお送りしませうか

◎それから忘れましたが、定價いくらで初版の部数はいくら、印税は何割ですか。

◎「人間」^{註9}。創刊号の小説はみなヒドイと思ひます。僕は、そのうち、昔の文藝批評のやうなものを書いて、おもひきつたことを述べたいと思ひます。永井先生^{註10}の諸作についても、潤一郎^{註11}の『細雪』^{註12}についても、その他、いいたいことがありますので、これは、筑摩書房の「展望」からずつと前からたのまれてゐるのですが・・・

◎「展望」といへば「展望」の二月号に少し書く小説は、去年東京でカンヅメになり、今年の一二月二十日ころカンヅメになり、して書きま

ので、強引に取られました。わたしてから、気もちわるくしてをります。

◎こんごは「人間」の小説にかかるつもりですが、寒冷(朝、顔をあらふのに、ウガヒのコップを、うがひをして、下におきますと、すぐ氷りつく冷たさです)のために、閉口してゐます。

◎かけごゑだけでなく、何とかして京都(奈良―大阪)に行きたいですが、汽車賃が二倍半になるのを俟つてゐれば、どうにかなるだらう、とうすい希望を持つてゐます。

一月二十一日夜

織田作之助様

宇野浩二

【註】(1) お変りになりましたお所書き…この当時、織田は宝塚の笹田家に同居 (2) 吉田定一…藤沢桓夫責任編集『文学雑誌』の同人。同誌48号が吉田定一の追悼号 (3) 木村君…木村徳三(きむら・とくぞう) (4) 三島書房…大阪の出版社。織田作之助『猿飛佐助』藤沢桓夫『大阪五人娘』など刊行 (5) 『八木弥次郎の死』(やぎやじろうのし) 初出『新潮』34巻1号(新潮社 1921.1) (6) 菊池寛君…菊池寛(きくち・かん) 1888-1948 作家・劇作家・ジャーナリスト。文藝春秋社を創設 (7) 「日本小説選集」…上海の出版社である太平書局が1943年や1944年に2冊刊行した単行本。宇野の作品「日麗天和(晴れたり君よ)」は第1集に収録。『現代日本小説選集』第1集(章克標訳 太平書局 1943.8) (8) 章克標: 1900-2007 浙江省生まれ。作家・編集者のほか教職にも携わっていた兼業作家。1918年から1926年にかけて日本留学の経験あり (9) 「人間」…昭和20年鎌倉文庫刊行の文芸

雑誌 (10) 永井先生・永井荷風(ながい・かふう) 1879-1959 作家
(11) 潤一郎・谷崎潤一郎(たにさき・じゅんいちろう) 1886-1965 作家
(12) 『細雪』・昭和18年『中央公論』1月号と3月号に第一回と第二回が掲載されたが、戦時中に掲載を止められた作品。戦後に発表を再開するも検閲等により改変を余儀なくされた。

【解説】

前号及び今号において翻刻した書簡は、推定だが、昭和20年の秋から翌21年初春にかけて、作家・宇野浩二から織田作之助に宛てて送られたものである。この三通の書簡(12月7日・12月12日・1月21日付)では、織田が雑誌連載を依頼されている「宇野浩二の手紙」と、創刊予定の雑誌『世界文学』(世界文学社) 関連のやりとりが多く見受けられる。夏頃から話題の中心となっていた、雑誌『新文学』(全国書房) 刊行に関するやり取りは一段落していたようで、この前後の書簡にはほぼ話題として登場しない。それぞれの近況や、文壇や文学についての批評といった作家らしい話題が多くなっている。

「宇野浩二の手紙」については、『定本織田作之助全集第8巻』所収の書簡(昭和20年12月10日付)に先に登場する。「出版屋の方で、まずそこから出ます「エス」という雑誌へ連載して、それから一本に纏めたい」との企画が織田に持ち込まれ、その仕事を引き受けることについて、織田が宇野に承諾を求めている。ここで織田は、「先生が私に下すったお手紙をそのまま借用して、その解説をしながら、一種の「宇野浩二論」にするつもりです。」として、単に書簡を並べるだけではなく、評論に成りうる記事にしたいという決意表明をしている。織田はそれに先立ち宇野への打診をしていたようで、宇野は、題名に難色を示しながらも、織田が随筆風に書く点に興味を抱き、承諾の返事を返している(12月7日付)。続く12月12日付書簡で、宇野は題名を「宇野浩二論」のようなもう少し

硬い題名に変更してほしいとの要望をしているが、その希望は叶わなかったようである。最終的に、「宇野浩二の手紙」連載第一回は、「宇野浩二先生の手紙」と題して昭和21年8月発行の雑誌『文化グラフS』(展望社)第3号に4頁にわたり掲載された。ここには、昭和20年3月14日・3月27日・4月24日付の織田から宇野に宛てた手紙が引用されている。題字と著者名は織田の筆跡が使用されており、力の入った記事であることがうかがわれる。しかし、第一回の末尾に「以下次号」との記載があるにもかかわらず、それ以降、「宇野浩二先生の手紙」が掲載された様子はない。作家・小笠原貴雄からの書簡(織田文庫書簡II・90)によると、織田からこの件の話を聞いていた小笠原を通じて、知人の出版社から「宇野浩二より織田作之助への手紙」を出版したいという内容の打診もあったようだが、書籍が刊行された形跡はない。連載第二回が掲載されるはずだったと思われる第4号の刊行が昭和21年12月であり、織田の最晩年と言ってよい時期であったことを考えると、続きを書くことが困難だったのかも知れない。織田作之助による「宇野浩二論」が、ごく一部を除いて幻の作品になってしまったことが非常に惜しまれる。

宇野の12月12日付書簡冒頭に「ソクタツのお手紙二つ一しよにとどきました。」とあるが、実は織田の12月10日付書簡は二通ある。織田が一通目を郵便局で投函して帰宅すると、宇野の12月7日付書簡が届いていた。そこで急遽二通目を同じ日に書いたからである。宇野は二通それぞれに対して、丁寧な返信を認めている。織田の友人である柴野方彦が創刊する雑誌が、当初の文芸雑誌から、『世界文学』という翻訳中心の雑誌に舵を切ったことについて、織田は「小生としても残念ですが、こういうホンヤクを主にした雑誌も一つ位(雨後の筍のように出る雑誌の中で)あってもいい」(12月10日付)と書き、宇野はそれに対して同意を示し、「翻訳の文学」の原稿に加えて、小説の提供を約束。また諸事情で遅れている「翻訳の文学」の執筆について鋭意努力すると誓いながら、多忙

を極めた現状を説明して、小説の掲載を少し遅らせるよう織田に依頼している。また、文中では、作家・北條誠の新作や、フランス文学者・伊吹武彦によるアンドレ・ジイドの未発表作品が『世界文学』創刊号に掲載されることを織田から聞いて喜んでゐる。しかし、『世界文学』は、なかなか発行の目途が立たなかつたのか、1月21日付書簡で宇野は、『世界文学』の具体的な刊行予定などについて確認している。『世界文学』第1号が刊行されたのは、昭和21年4月のことである。織田の12月10日付書簡に「創刊号の『翻訳文学』について『首を長くして待つております。』とあるが、創刊号に宇野の「翻訳の文学」が掲載された様子はなく、世界文学社から宇野の書籍が刊行された形跡もない。世界文学社とは織田を通じて連絡を取り合っていたため、織田の死によって掲載の約束が自然消滅したのかもしれない。

また、宇野の12月12日・1月21日付書簡では、三島書房から刊行される予定の叢書についても、かなりの紙幅を費やしている。織田の12月10日付書簡の一通目は宇野に対する諸事依頼の手紙で、依頼内容は三点ある。一つが「宇野浩二の手紙」の件、次が『世界文学』の原稿の件、そして三つめが大阪の桃源社が刊行予定の「桃源叢書」に対する宇野の旧作の提供依頼である。宇野は「晴れたり君よ」「一と踊」「枯れ木のある風景」の三篇を入れたいと答えている(12月12日付)。しかし、1月21日付書簡では、「八木弥次郎の死」の収録も検討しており、収録作品の内容のバランスや、表題作を何にするかなど様々なことを考慮して収録作を決めようとしている様子が伝わる。「桃源社」から「三島書房」に社名変更され、当初の予定であった「桃源叢書」が「三島叢書」と改名されると宇野は予想を立てているが、「三島文庫」に落ち着いたようである。宇野の作品集は最終的に『枯れ木のある風景(三島文庫5)』(三島書房)として昭和21年11月に刊行されている。「晴れたり君よ」「枯れ木のある風景」「八木弥次郎の死」ほか五篇が収録されているが、「一と踊」は含

まれていない。残念ながら、作家の希望全ては通らなかつたようである。

そのほか、12月12日付の書簡では、『オール読物』(文藝春秋社)に織田の小品「髪」が掲載されることに関して、文藝春秋社が同社の雑誌間で原稿を融通しあう「アクヘキ」について述べ、織田が新国劇役者の辰巳柳太郎に出会ったことを報告すると、役者評を書き、「夫婦善哉後日」執筆のことについては完成への期待を表明し、哲学者・土井虎賀寿が「ゲエテ論」の翻訳の先を越されて悔しがっていることに対しては、原著者と翻訳者に興味を示すなど、織田からのたわいない近況報告に、一つ一つ項目を立てて答えている。

これらの書簡の中で、宇野は繰りかえし大阪や京都を訪問したいと書いたり(12月7日、12月12日・1月21日)、織田に上京を勧め、食事に誘ったり(1月21日付)している。同様に織田も宇野への書簡に、「甘いものはふんだんにご馳走します。」などと書いて宇野の来阪を心待ちにしていたようだが、この後宇野と織田が関西で対面したという記録は残っていない。二人の交流は、昭和21年11月10日に「土曜婦人」の取材のため上京した織田が、宇野浩二を訪問した時が最後となった。この時、二人は三時間にも及び会談したという。宇野はこの会談後去りゆく織田の姿に織田の作品の根底にあるものを見出し、織田の死後、珠玉の作家論「哀傷と孤独の文学 織田作之助の作品」を『中央公論』昭和22年4月号に寄せている。

【調査に使用した資料】

- ・増田周子編『宇野浩二書簡集』(和泉書院 2000)
- ・増田周子編『宇野浩二文学の書誌的研究』(和泉書院 2000)
- ・『定本織田作之助全集第8巻』(文泉堂書店 1978)
- ・宇野浩二「織田作之助の思ひ出」『人間』第2巻第3・4号(鎌倉文庫 1947.3-4) ほか

弔辞

(一) 藤沢桓夫 昭和22年1月23日【請求記号：織田文庫その他II・8】

織田君

君も僕も大阪に生れ、われわれの文游^{註1}は君の作家生活の出発と同時に
にはじまった。顧ればそれからまだ僅かに十年にも満たない
しかも今日僕は君の霊前にこの哀悼の文章を捧げねばならない。朔風徒
に寒く僕は唯感慨無量と言ふて他はない

君は性来病弱の人であつた。しかも君は君の天職である文学を愛するの
餘り、君の生命を忘れた。それは驚くべきことであつた。しかも僕はそ
れが見事であつたと言はなければならぬのを悲しむ。

君は生れながらの筆の人、才藻^{註2}の人であつた。同時に君はまた稀に
見る努力精進の人でもあつた。宜なるかな、君弱冠にして早くも頭角を
現し才筆に呵し、機智縦横^{註3}、天馬空^{註4}を行き、獨歩の織田作文学をもつて
今や汎し天下にその名を轟かせた、正に4人のうち唯一人のなし得る覇
業であり、君また或は以て瞑すべきであるかも知れない。しかし君を
幼少の折から我兄以上の愛情をもつて養育され君の保護者であること
を最上の誇りとされ、君を杖とも柱とも頼りにして来られた君の兄さん
御夫妻の悲嘆を見る時、何故もう少し身体を劬「イタワ」る氣になつて呉れ
なかつたのかと今更ながら僕はいさゝか君に苦情を言ひたい氣もする。
しかもまた翻つて僕は思ふ。君の悲壮なる最期は文学者として誠に立派
であつたと。その不断に溢れ出づる才能の故に、奔放不羈^{註4}の空想力の
故に絶えず何か書かずにゐられなかつた君、書いてゐる時が一番楽な姿
勢であつた君、君もまた人生の異常児であり、宿命的な文学の鬼であつ
た。しかも君は君のその光榮ある宿命に殉じた。殉じて倒れたのである。
その様な意味に於いて、可能性の文学を説いた君は、同時にまた文学の可
能性―小さき一本のペンの無限大に繋がる仕事の可能性を身をもつて

世に示した。輝くエスプリの人でもあつた。

それは君にとつては勤勉であるよりも、先ず可能であつたのだ。われわ
れ君の友人は君の貪欲にも比すべき旺盛なる仕事振りを鞭とし、君に嗤
はれないだけの精進をこゝに誓ふものである。

織田君

ともあれ君は文学が男子畢生の事業たり得るに足るとも身をもつて天
下に示して呉れた。そしてこの國のすべての文学者たち、並びにすべて
の文学を愛する人たちからその不世出の鬼才を惜しまれながら去つて
行くのである。

男子の本懐と云ふべし。
それだけにまた君のあまりにも
慌しい夭折に對する僕たち

友人の怨みも深いのだ
では

織田君

さようなら
どうか僕たちの悲しみを
受けて呉れ給へ

昭和二十三年一月二十三日

藤澤 桓夫

【註】(1) 文游(ぶんゆう)…文学の遊。游は遊に同じ。(2) 才藻
(さいそう)…詩文の才能。文才 (3) 機智縦横(きちじゆうおう)…
時と場所に応じて自由自在に才知を働かせること (4) 奔放不羈(ほん
ぼうふき)…何者にも束縛されずに、世間のきまりやしきたりにとら
われないで、思うままに振る舞うこと。また、そのさま。「不羈奔放(ふ
きほんぼう)」ともいう

(二) 柴野方彦 昭和22年1月23日 【請求記号：織田文庫その他II・10】

織田君

僕はかうして君の近親者や先輩、友人、君の愛した人々に取りまかれた中で、君への弔辞を讀まうとは夢にも想像しなかつた

織田君

君は僕に屢々言つたではないか

五十迫生きるのだ、五十になれば俺の作品もなんとかなるだらうと

そうだ 君は若くして文学の鬼才と讃えられ、その特異なスタイルと達者な筆を以て、二十代にして一躍文壇に名をなした。然し君の言ふ通り、我々は君が更に人間的に幅も深さも出来れば、君は嘗「ハジメ」て我國に出なかつた大いなる構想をもつたロマンを作り得る只一人の人となると期待してゐた。僕は勿論尊敬する先輩諸氏もそのことを君に語り、君の自重を祈つたではないか、そう言時 君は我々の言葉にうなずき乍ら、熱につかれた様に首を振り、五十迫生きるんだを繰り返へしたではないか

織田君

君は何故その言葉の通り、せめて五十迫生きて「ドウダ」と自信を以て言へる作品を遺してから死ななかつたのだ。余りに早すぎたではないか

織田君

僕が初めて君を知つた三高生の時、君は出町の交番で大本教^{註1}と間違へられて調べられたと言ふ長い髪を振り振り 文学の話をしてゐたね。東京の本郷の下宿でゴロゴロしながら友人の下宿から下宿へと訪ねて、矢張り憑かれた様に文学の話をしてゐた。君の名が文壇で異彩を放つ様になつた最近でも、君は矢張り文学の話ばかりだつた。僕は君の様に文学に憑かれた人を知らない

作品に俺程もとでを掛ける作家は尠いだらうと君はよく言つた。そうだ君は余りに もとでを掛けすぎて来た。若い君の生命迫つぎ込んでしまつたではないか

織田君

君は將棋や麻雀や競馬など賭事が好きだつた。賭け事が好きだつた君は、とうとう君の若い生命を文学に賭けてしまつたではないか

ついでの間 東京の病床で君は元氣な顔をして僕に何んと言つた

「まあ俺が暫く留守にしてゐる間はお前は京都で羽をのぼしておけ」とそして君特有のあの甲高い聲で笑つたではないか、ところでそれから一ト月も経たぬ間に君は我々友人を残して 忽然と逝つてしまつた。僕はこれから誰と悪口の叩き合ひをすればいいのだ

織田君

普通で言へば君よ安らかに眠つて呉れと言ひたい。然しそうした言葉を素直に受け取る君でもないだらう
それならば僕も言はう

織田君

君は文字通り文学の鬼となつて、相変らずギラギラ光る眼で我々を睨「二ラ」んでゐて呉れと

昭和二十二年 一月二十三日

友人

世界文学社々長 柴野 方彦

【註】(1) 大本教(おおもときょう)：明治末、出口ナオを教祖として
出口王仁三郎(でくちおにさぶろう)が組織した神道系の新宗教

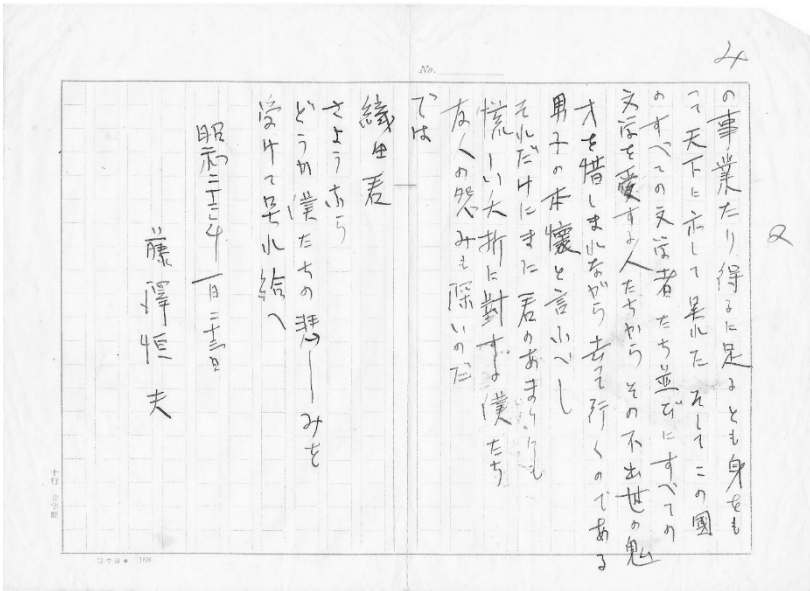
【解説】

昭和22年1月23日、大阪市内の楞嚴寺で営まれた織田作之助の葬儀の際に、葬儀委員長を務めた作家・藤沢恒夫と、友人総代を務めた世界文学社社長・柴野方彦による弔辞である。この2人は文学雑誌の出版などで織田晩年の文学生活にとりわけ深い関わりを持っていた。

これまで、特に藤沢恒夫の弔辞については「君は君の天職である文学を愛するの余り君の生命を忘れた。」の下りなど、様々なところで一部引用されているが、今回は全文を翻刻した。自己の存在の全てをかけて文学に取り組んだ織田への賛意を示しながら、一方でもつと体を厭い、長く生きてもつと書いてほしかったと願う。しかしそう願いながら、同じく文学を愛する者としてその生き様を認め、傍観するしかなかった悲しみと悔恨が、両者の弔辞には共通して溢れている。先述の宇野浩二による「哀傷と孤独の文学」からは、「孤独」で「哀しい」作家という印象が強い。しかし、これらの弔辞で織田作之助は「文学の鬼」「文学を愛する余り、文学に全てを賭けた作家」として語られている。いずれも現在の我々が「織田作之助」という作家に対して抱くイメージにつながっている。

弔辞（藤沢恒夫）

【織田文庫-その他II-8】



弔辞（柴野方彦）

【織田文庫-その他II-10】

